

ボールの行方

小川未明

青空文庫

しょう 正ちゃんは、いまに野球のピッチャーになるといっています。それで、ボールをなげ遊ぶのが大ですが、よくボールをなくしました。

「お母さん、ボールをなくしたから、買っておくれよ。」と、学校へいこうとしてランドセルをかたにかけながら、いいました。

「また、なくしたのですか。二、三日前に買ったばかりじゃありませんか。」

「僕、ボールがないときびしいんだもの。」

「いいえ、そう毎日、ボールばかり買ってあげられません。」と、お母さんはおっしゃいました。

「ねえ、お母さん、もうなくなさないから。こんどから、きつとなくなさないから。」

「なくなさないよ、なんどいいましたか。ものを粗末にするからですよ。」

「粗末になんかしないよ。だって、どつかへいつてしまうんだもの。」

「おとなりの誠さんなんか、おちついていらっしやるから、おまえみたいに、そういうものをおなくしになりませんよ。」と、お母さんは、となりの誠くんのことをほめられました。

「誠くんだって、なくすやい。昨日、上ぐつを片っぽおとしてきて、お母さんにしかられ

ていたから。」と、正ちゃんはいいました。

「じゃ、今日は買ってあげますから、名まえを書いておきなさい。」といって、お母さんはボールを買うお金をくださいました。

「ありがとうございます！」と、正ちゃんはいたでいて、元氣よく出かけました。

「やさしいいいお母さんだなあ。」と、正ちゃんは心の中で思ったのです。

正ちゃんは新しいボールを買って、それに「二年一組 山本正治」と書きました。

正ちゃんの帽子にもハンカチにも、けしゴムにも、みんなそう書いてありました。だから、学校のおとせば、拾った人が先生にとどけてくれますので、また自分のところへもどつてきました。たとえ学校の外でも、正直な人なら、

「ああ、あの学校の生徒さんがおとしたのだな。」といって、学校へとどけてくれました。

正ちゃんはお家へかえって、「ただいま」をすると、お母さんのところへいって今日買ったボールをお見せしました。

「いいんですね。名まえを書きましたか。今年から二年生ですよ。」と、お母さんが注

意をなさいますと、正ちゃんは、

「ほら、二年一組と書いてあるだろう。」と、いつて、お母さんにボールをもう一ど見せました。

「正ちゃんはぼんやりしているから、また一年と書きやしないかと思つたのよ。」

そのとき、お姉さんが、

「ね、正ちゃん、ピッチャーは、どんなかつこうをしてボールを投げるの。」と、いいました。

「笑うから、やだあい。」

「笑わないから、ようおしえてよ。」と、お姉さんはいいました。

お母さんも笑いだしそんな顔つきをむりにこらえて見ていらつしやいますと、正ちゃんはボールを持った右手をぐるぐるつと頭の上でまわして、片手をあげて投げるまねをしました。

「まあ、すてきね。」

「僕の球は、それはカーブがあるんだから。」

「あまりありすぎて、球をなくすんでしょ。」と、お母さんがおつしやつたので、お姉さ

んは、声をたてて笑いました。

原っぱへいつてすればいいのに、正ちゃんはせまい往来で、小さい花子さんを相手にキャッチボールをやっていると、正ちゃんの投げたボールが、からたちの垣根をこして、向こうの庭にはいつてしまいました。

「困ったわね、正ちゃん。」と、花子さんがいいました。

「どこへはいつたんだらうな。」と、正ちゃんは、からたちの垣根のあいだから、庭の中を見ていました。

すると、ちようど日のよくあたるあちらのえんがわで、おばさんが赤ちゃんのおしめをかえてやつているところでした。

お庭の木には、かきが赤くうれておりました。赤ちゃんは、なにがおかしいのか、けた声を出して笑っていました。

正ちゃんはボールのことなど忘れてしまつて、かわいい赤ちゃんの方を見とれていました。

「赤ちゃん、かわいいな。」と、花子さんの方を向いていいました。

「どれ、私にも見せて。」といつて、花子さんも垣根のあいだからのぞいて見ました。

「僕んちにも、あんな赤ちゃんあるといいのだがな。」と、正ちゃんはまたのぞいて見ま

すと、赤ちゃんは、おしめをかえてしまつて、おばさんにだっこして、笑つていました。

正ちゃんはボールのことをやつと思ひだして、

「花子さん、拾つておいでよ。」と、いいました。

「私、いやよ。正ちゃんがいいわ。」

「花子さん、早くいつておいでよ。」

「おばさん、まりがはいつたの。」と、花子さんがいいました。

すると、男の声で、

「いま、拾つてあげますよ。」といつて、おじさんが拾つて、こちらへ投げてくださいま

した。

あちらから、太郎さんと誠さんがやつてきました。

「原つぱへいつて、キャッチボールをしない？」と、いいました。

「ああ、しよう。」

「正ちゃんはいきかけて、花子さんに、

「花子さんもおいでよ。」と、いいました。

「私、お家へかえるわ。」

「また、あした遊ぼうね。」

三人は、原っぱへきました。太郎さんのたまは、いちばん強いのです。つぎが、正ちゃんのためです。誠さんの弱くてそれたりするので、

「もつといいたまをお出しよ。」と、太郎さんがいいました。

このとき、向こうで三人のまり投げを見ていた少年が、

「僕もなかまに入れてくれない？」と、いいました。

正ちゃんは、太郎さんと誠さんに、

「いいだろう？」と、ききました。

「ああ、いいよ。」

そこで、四人はかわるがわるキャッチボールをしました。少年のたまはなかなか強いので、正ちゃんや誠さんは、たびたび受けそこないました。

「君のたまは、すごいんだね。」と、正ちゃんが感心すると、少年はもつともつと

強つよいたまを出だそうとしました。

そのうちに悪わるいたまを出だしたので、ボールはとおくへころがって行って、みんながそのあとを追おいかけてさがしたけれど、わからなくなりました。

「あんな悪わるいたまを出だすんだもの。」と、太郎たろうさんがいました。

少しょう年ねんは顔かおを赤あかくして、

「僕ぼく、弁べん償しょうしてあげるよ。」と、いいました。

「君きみ、あやまつたらいいだろう。」と、誠まことさんがいました。

「僕ぼく、なくしてすまないと思うよ。だけど、お金かねを持つもっているから、買かってかえすよ。」

と、その少しょう年ねんはいいました。

正しょうちゃんちゃんは、またボールをなくしてしかられると思おもったけれど、

「みんなで遊あそんだのもの、そんなことしなくてもいいよ。お母かあさんに買かってもらうから

。」と、いいました。

「僕ぼく、たのんで入いれてもらったのだから。」と、いいしますので、太郎たろうさんが、

「じゃ、正しょうちゃん、それでいいじゃないか。」と、いいました。

四人は学校の前へいつて、お店でボールを買いました。正ちゃんが、「また、ボールをやらない？」というとき、誠さんも太郎さんも賛成しましたが、少年はお使いにきたのもうかえらなければならぬといいました。

「さようなら！」

「また、おいでよ。」

少年は三人とわかれて、さつきといつてしまいました。正ちゃんは、少年の買ったくれた新しいボールを見て、なんだかいい気持ちはしなかつたのです。

「気のどくなことをしたな。どうしても買ってもらわなければよかつたのに。」と、心のうちで思いました。

正ちゃんは家にかえると、お母さんにそのボールを見せて今日の話をしました。

「どこの坊ちゃんですか？」と、お母さんはおききになりました。

「僕、知らない。」と、正ちゃんが答えると、

「これから、そんなときは、いいと、ことわるものですよ。」と、お母さんはおつしやいました。

あくる日、正ちゃんは花子さんと原っぱで遊んでいました。

「正ちゃん、ここへきてごらんさい。ありがなにかはこんでてよ。」と、花子さんがよびました。

正ちゃんが走っていくと、かわいらしい小ぢやなありのむれが、なにかくわえて、列をつくって走っているのです。

「花子さん、もう冬のおしたくで、いつしようけんめいなんだよ。」

だんだんとつながり進んでいくありのむれを、二人は足ずりして追っていくうちに、正ちゃんは昨日なくなったボールが、枯れ草の中にかくれているを見つけました。

「ボールがあつた!」

正ちゃんはよろこびの声を、あげました。そして、なつかしい自分のボールをにぎって、しばらくぼんやりとしていました。

「どうしたの、正ちゃん? なくなったボールが見つかったの?」

「僕、なくなつたと思つていたら、あつたのだよ。あの子に弁償してもらつて、どうしようかなあ。」と、正ちゃんはポケットからもう一つのボールを出して考えていました。

「誠さん? 太郎さん?」

「知らない、あつちの子だよ。」

「きのう？ 太郎さんくらいの子でしょ？」

「そうだよ。」

「牛込の兄さんだよ。正ちゃんたちがボールをしていると私がいったら、兄さんはとんでいったわ。」と、花子さんがいいました。

「じゃ、このボール、兄さんにかえしておくれ。」

「こんどきたら、かえしてあげるわ。」

正ちゃんは花子さんに、少年の買つてくれたボールをわたすと、気もちがらくらくとしました。

そして、自分のボールを力いっぱい空に向かつて高く投げあげたり、受けたりして、遊んだのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷

1983（昭和58）年1月19日第6刷

※表題は底本では、「ボールの行方《ゆくえ》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2015年5月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ボールの行方

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>